





明治十九年四月九日内務省贈付



尾形大守斯波義重





象鴻昇之助

治源車小杜王天



佐野鹿藏

維本佐野朝義



卷中目録

- 一回 鹿藏主を負て濃州へ赴く話
- 二回 大館浮田民助を看止る話
- 三回 同 民助を殺害する話
- 四回 小車忠僕の死を止むる話
- 五回 小戸田非人鹿藏を救ふ話
- 六回 鹿藏象瀉昇之助を伏す話
- 七回 同射術乃響を頭す話
- 八回 忠僕志操を明し退去する話
- 九回 郡代三浦進物を鹿藏へ贈る話
- 十回 鹿藏大井川ふて危難の話

通計拾回

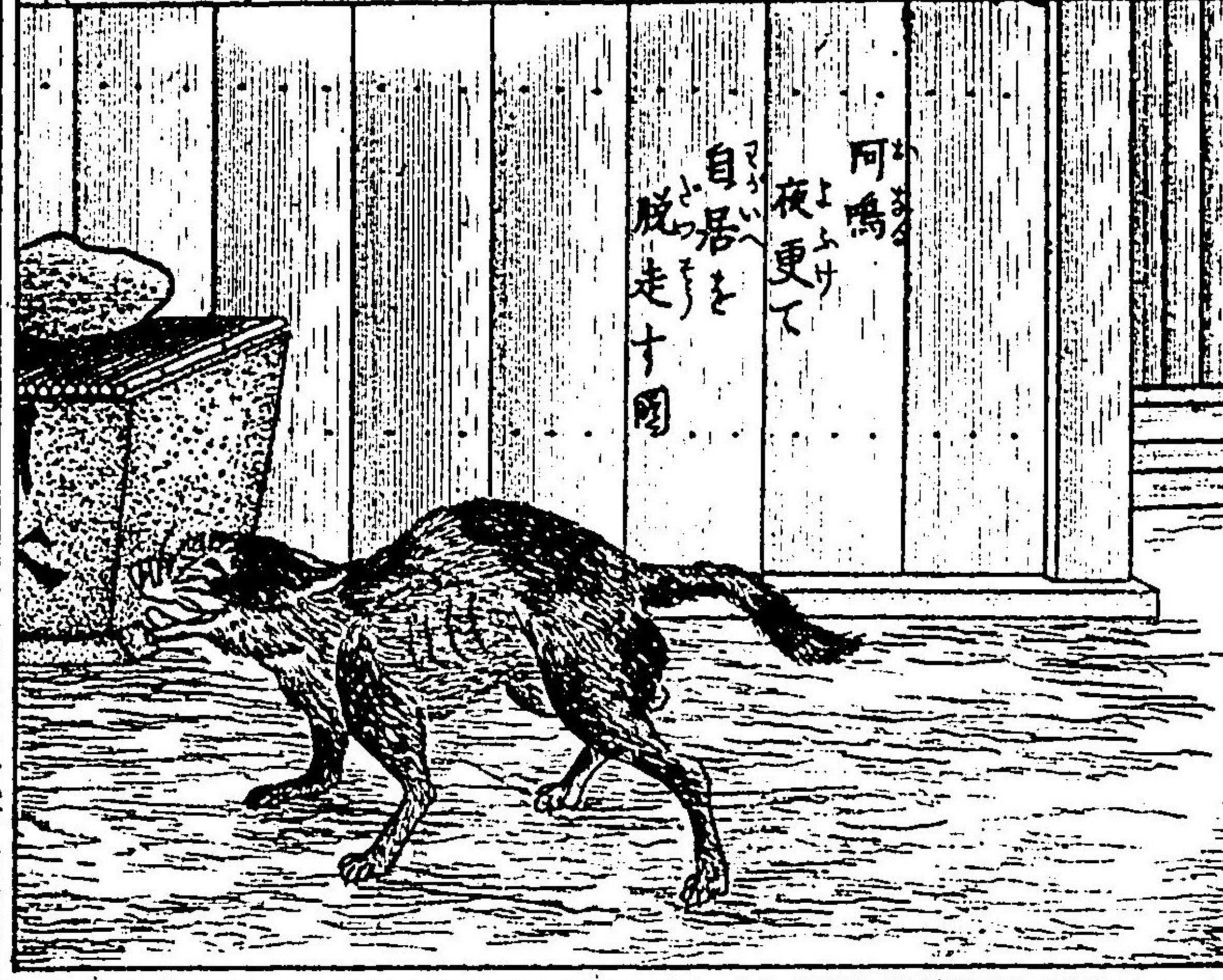


大館七郎右衛門



繪本佐野親義録第四編

此時鹿藏ハ素知の顔にて座直り民助ハ  
 先頃より台鳥追近接所ヤを捜索侍ハ共  
 是ハ可也此邊ハ居侍ふまじ然ハ無要支  
 御發途給ヤ向後行向後費ハ臨機應  
 調ハ可也云ハ民助照頭死誠ハ汝申如  
 既ハ病苦ハ愈々バ不日此は出立べし  
 就てハ方ハ誠心禮を述べ那を為謝ヤ  
 全快成也皆介方ハ至矣も竭着病具ハ  
 成ハ正ハ我命の親共云ハ汝の外ハ非  
 浮戻へて台掌鹿藏を拜ハ歡喜けり鹿藏  
 是頂戴さ謹勿体よの命言ハ忠も竭ハ臣  
 是式の所為仕侍ふ進御願ハ願りてハ算加  
 湯侍ふべけれ假令下僕ハ射ハ臨醫ハ被為  
 御先迷着遂てヤ侍ふべき明後日ハ佳日成



阿鳴  
 夜更けて  
 自居を  
 脱走す所

ハ御全快を祝と首途と仕るべし其御心構へ  
 御在べしと云ハ民助打悦喜主ハ宿料の  
 残の杯拂ひ主從其鳥を待よける諸其夜渡女  
 子阿鳴ハ鹿藏ガ浴ます間を考へ民助ガ側  
 走り來て廻り嘆て為怨様明後日ハ君俺家  
 出立給へ由何成所用の有様ハ最期の手枕  
 有さへ優き睦言忘らんハ絆と成別ハ思ハ  
 うし迫ハ十日も向ハ啓行延せて羨ガ心を安  
 めて給と通身射副うき口説けバ民助も了得  
 愛着の念ハ涙を流し理りなき憑然社有共行  
 細を懐く俺躬上先刺話十條の路費も今ハ竭  
 りも到ハ旁々以て首途を急げり再なん立選  
 鳥も可有息ハ要時離別と思取て再會の時節  
 も等給ねと云慰むんと阿鳴ハ聞す否々那連  
 遷り給ふ可哉矣ハ御路費の竭し成ハ些少成  
 共才覺成し尊君の御用ハ立侍まバ十日半月





御滞留も管ず為給ハる哉と云ふ民助困  
 果奈何其準備ハ可有時ハ休カ許マ運留セ  
 んと云を聞テ阿鳴ハ歎ビ喃御心易ク思シ召  
 妾ハ黄金調ヘ侍人努々虚謀給ふると云時翁  
 の佐兵衛ガ声阿鳴々々勝手方より被呼立テ  
 証方多く心残而起テ行ケリ民助ハ處女の一  
 言ハ是ハ迷惑成絳仕出シリ倘女子心の一  
 より不良金調ヘマ罪我射上ヨクもすべし  
 如何せん急踏野へ鹿葎浴ミ而立取ルバ民  
 助今ハ秘む無術阿鳴の絳の一伍一什是非  
 謙セバ一先生ナト世ハ婦人程思シハハハ  
 是ハ速ハ避給ふ可今宵の中電給ヘ運滞  
 セバ災害待ハんと云ハ民助黙頭テ主徒直  
 躬準備而近村楠葉の農夫方知日の逗留  
 朝首ナ立飯ベシと亭主告テ主從ハ虚謀テ



浮田  
 主從  
 夜陸  
 大和  
 路一  
 踰る  
 圖

牧方淡路屋の宅も立出挑燈火ノ道も素の夜  
 踰ハ大和路へ越サケテ徒淡路屋方其後  
 浮田主從ハ飯來ラナ尚處女阿鳴ガ露ハ世金  
 を偷出一通の書遺ヲ残シテ脱出行衛知カ  
 ルハ其騷動一方成テ渾家各人狼狽リ案下休  
 題浮田主從ハ先南都迫立踰ルハ窮而ハ介野  
 体も不厭假マ武者修行ト云計校道場草庵  
 宿を乞一椀の食ヲ預リ仇の巢穴ヲ探マ些の  
 手係も得ナ巳ハ大和一國ヲ巡歴成筒井城  
 府ハ到処民助病惱再發す鹿葎駭ラカ當感シ  
 今ハ餘分の貯ヘ無ハ宿ヲ憑日ガ衣類悉皆  
 沽却成テ介價ハ以良劑ヲ未メテ民助ハ服用  
 今ハ其躬ハ往還ハ出テ旅客ノ行李ヲ持或ハ  
 小用ハ使越ハ僅少の實錢ヲ囉而旅宿の雜費  
 は横死ハ民助ガ側ヲ離ナハ抱成ハ忠誠  
 天の憐愍給フ哉十日ヲ不遇民助快腹す鹿葎  
 此上よく歎びつ今ハ心易シト民助ハ向ハ



四編  
 五



て云様御病後御保養も侍ふ成と最早路銀限  
 リ為場上ハ逗留仕る更勿々為難く御覽の如  
 衣類も售拂侍ルバ姑くハ非人ハ躬落て敵の  
 巢穴も窺ひ稟ハ射ハ却而易る可侍へ御主  
 人ハ其境界を期給うしと云バ民助打点頭  
 諾而兼氏の刀を竹杖ハ仕込て腰ハ佩未歩行  
 自由不得ハ鹿藏主を背負て筒井立て  
 高倉時を打越懸て京都に到リ茲ハ廿日計鳥  
 果浴中浴外を徘徊ふし歎や有うと探共手  
 保リ敢て得解まく終ハ京を立出て東京道の  
 驛路も探リ草津を越て中仙道ハ入日累ぬ  
 美濃國まる加納の傍天王杜近く着けリ抑天  
 王の社と云ハ梵天帝釈二天を祭る一字の  
 最洞有て四面樹木繁茂晝夜寂莫る陰地ニ  
 境内尤も廣げんハ何時程も非人等集台今  
 ハ五十名計も竹立團し薦を結付ト居せリ  
 其中ハ小車源治と呼非人の頭有リ此者頗る



伏氣ハ才智深且仁義を守性質成ハ何なる謂  
 一ヤ非人ハ陷未と齡ハ三十ハ未滿ハ空ハ當  
 所ハ埋朽す然程ハ忠僕鹿藏ハ病後の主人を  
 背ハ負教日遠路を歩行し者うら躬体今ハ太  
 ど勞れ奈何せんと思惱めハ天王の社の  
 中ハ君子乞食と称せらる小車と云非人頭  
 義依成と聞知彼所ハ行て渠ハ依頼て霎時程  
 旅の勞を憩め給へと民助ハ申けれハ宜しく  
 計ハ侍へと云ハ鹿藏杜の中ハ進行小車源治  
 阿州の的と云虛実を雜へて一向ハ組下ハ  
 成給んと憑けれハ源治頼兼引浮田至從ハト  
 居せる怪の團を組下の非人等と俱ハ造作セ  
 リ至從ハ小車を始とし食の非人ハ恩を謝し  
 件の薦舎ハ潛リ入て長途の草臥を憩めける  
 ○拾四回 大館浮田民助を着止ハ話  
 夫人間の盛衰ハ於ハ賢愚の差別ハ不就志  
 操の川ハ非ざるハ殊ハ浮田の主從ハ容



民助を  
 養路徘徊  
 する図



歳難波よ於て大難を受震時獄舎に繋れ其後  
 民助病者と成て果日て平臥為す療費を竭し  
 一とび愈と雖も財尽て保瘞の不成より腹發  
 病し行歩も任ざるを忠僕主を助て方今美濃  
 國に來と調劑を索る貯も非されバ保瘞を設  
 けん手使ハまく剛勇の鹿藏も貧の疾まじま  
 痛の神は祈り佛を託ち唯民助の本腹を待耳  
 公年三冬沍塞躬を刺が如く依之て民助亦々  
 疾病五躰を徹へ無慙や終は寔人とぞ成けり  
 鹿藏之は嘆天而最寒も不厭垢離をうき倅僕  
 天王の杜ま在る小祠も百度詣を成て主人の  
 雙へを立し給へと丹誠を抽んで祈誓と異  
 頭も利益も首へ十公歳も暮果應永十稔の  
 陽も如月とぞ成とリ是一日小車源治ハ民助  
 が薦舎よ出來て曰く你達ハ主從と被思成去  
 稔十月當地よ來て介如被煩る長の介抱男手  
 よて着病彼鹿藏ハ儲々世も珍敷忠義の人哉



思ふに價違ハ非人と成共由緒有べき人と覺ゆ  
 今日ハ鹿藏も薦舎も不着ハ稼よ出ると思  
 ろる 是日頃迄閉費てハ尚替病して思うるべ  
 さ此麗景成快晴些坊堤へ出氣を晴されよと  
 慰ける 按下休題大領七郎右衛門ハ難波を逐  
 電まして此美濃國よ來つ加納の邊成長池村  
 へ寓居而手跡指南着版出し夜ハ郷の壯者們  
 へ劍法柔術を教授杯而専ら巧言令色もて人  
 を引け黄白を貪り己が俸よぞ打過し息一日  
 大領所朋有て加納も趣く序も天王の杜小鳥  
 堤まる櫻花を一目せん也不覺歩行よ來掛首  
 非人集合花を愛而雜談成餘念も非ぬ風情  
 大領ハ無那心傍徨り編笠の裡より瞻しル  
 是如何非人中に年來己を附覘ふ浮田民助  
 交リ在バ大領一度打駭然つ原來ハ奴們當  
 國よ來俺の在処を尋る成ん着禁られじと介  
 僂よ途を急ぎて長池村よ立返り是が心よ係





れバ思惟而此奴輩近辺に非細時ハ安堵難し  
 と奸計を設け一日剣道の弟子兩三輩打招き  
 酒を調へ饗應死竊は密吏を談柄り尚候辨以  
 民助を返討し成功力を依頼見ハ弟子們三名  
 一味而倅傍今日ハ雨天と云究竟の時成ハ黄  
 昏より押掛行んと云大館深く歡喜斯様ハ  
 方策を成んと耳口寄嘆げバ白痴的們ハ  
 點頭猶も悪吏の商議よしけり  
 拾五回 大館浮田民助を殺害の話  
 時ハ如月廿七日晨より鹿雨頻り隆天王の  
 杜の非人門ハ終日の雨も多く出す薦舎ま在  
 て雲を待ける波浮田民助の主従も俱雨を  
 凌ぎ閉ぢりつ鹿蔵ハ從朝打扇を細み縷八  
 指ハ袂草鞋整へま掛り終日怠惰す道り見  
 其鳥も既に晩近く成春雨漸く降止とれど  
 雨後の混り寒き強く御躬も當バ思ふるべ  
 しと鹿蔵ハ民助の身体へ薦を幾重とまく纏



ハ世其躬ハ薦舎の外面より出て男女の非人と  
 焚火杯して寒を凌げり爰一個侍士天王の祠  
 近歩行倚高声ハ小車在ヤと呼ハ源治  
 那釋成りと走來り侍士の前ハ蹲踞て禮を成  
 バ那侍士の曰く此方ハ加納文彦所の下有司  
 真大兵衛と云者へ前青國守の御金庫を偷  
 賊入て要金若干を掠奪行方不知諸方御詮整  
 等關成ハ共以今其手係を得ず支配下吟味最  
 中其方們ハ上の御不審非すと虽も大切の  
 釋さる一應御糾明有成併し駭然ハ不逮唯  
 御命令の旨を兼ハる向の釋成ハ若人童子病  
 者の外不殘疾く打列て森とや俺ハ次の里  
 へ急こと忙ハしく馳去見小車源治ハ非人  
 們ハ火急の呼出の釋を言聞せ食來るべしと  
 打列行ハ鹿蔵ハ主人の躬上氣遣と思ふ者  
 少時天王の祠の裡ハ臥給へと背負上列行





隅方よし下し鹿を引鎖立出んバ民助那心よく  
 呼止め是々鹿藏疾戻れや汝を等ぞと言声  
 ハ至從今世の暇を共神成の躬の知ぬ鹿藏早  
 速還侍ふ内と外との應答を一つ鹿藏小車  
 と俱み出行ぬ這時大勢の非人ハ立去蔦舎ハ  
 食空蟬と成阿光老婆の病人唯一個耳蔦舎ハ  
 有けれバ杜の裡専寂寥松吹風葉漏柔く泉の  
 声梢に聞へ物すごき時那里に躲て為窺けん  
 頭ん為出三個の癖者時分ハ宜と点頭台天王  
 の祠へ進み寄荒々敷扉を押開蹇人ぬハ何方  
 へ臥ぞ民助の異口よ呼立る是ハ那的くと民  
 助ハ駭き下ら答も不為只黙止て窺ひ居バ一  
 個の癖者声を發し浮田民助疾出よ汝に遭て  
 為得とめ意人の來訪せしそと呼る声音ハ覺  
 有仇大館が声成バ民助もつと二度愕然嬉さ  
 言方ハ無んど疾ふ勞し其上ハ不行と成躬  
 の哭き得難敵と知まがら隨便まや鹿藏ハ居



合さす是口惜哉と氣ハ不覺普々這ひ忍び泣  
 て伏し見外面ハ大館打咲腰抜武士の成下  
 野伏を食の具器拾約よ等き大侍士奴何も相  
 出給へと云ふ二個弟子ハ為心得と進み入  
 驚掴み民助の襟髪捕て用捨なく宙に懸上祠  
 の外へそ引居ける大館側の后に腰掛久やま  
 浮田民助汝が親を討て無念と思ひ適よ  
 訪來大館七郎右衛門と勝負せずや脚腰不立  
 迎待士らしく汝ハ刀を得抜ざるやと言ひ  
 不敢蹴飛し抜手も不着民助の肩先丁ど斬込  
 巴被漸下ら民助不透竹杖の刀抜んと為弟  
 子兩個して左右腕を引捕へり民助ハ苦痛を  
 忍び隠懼怯大館病さうバひ一民助一個を  
 徒黨を語ひ腕を押し返り討とハ末練至極の  
 此舉動鹿藏は此ハ有成バ暗々汝門よ討ま  
 じきま病者と衝込極重悪人喰ひ附共不飽足  
 奴痿々殺しや恨めしや鹿藏飯ぬや鹿藏喃





と声も量も哭叫ぶ大箱おろりと面を瞻め  
 る民助是此劍ハ則ち兄為十郎を自滅させ  
 り正真の朝日丸橋左近之助も手端は使ひ  
 く宝庫を竊入しめ思ひ我所持す劍の切味  
 親傳五右衛門並に今汝が一命通試し着り  
 冥土土産話も謂て調を復汝が持つる鹿藏奴  
 も追付冥途へ同道させん今宵地頭の詮整と  
 為言鹿藏始の非人門を為釣出ハ是余所為成  
 も知すや親も子も我手は係ハ能々の因縁成  
 んと為嘲哂バ民助怒の眼を視開さ諸ハ劍の  
 偷賊も汝師弟の所為よて有しと撰州川崎  
 て偽謀を設け約よ遠ひ其躬を遁れ毒計を遣  
 而俺們を苦め今又加勢を引て返討ハ己社  
 腰拔侍士民助が怨の一刀真此餘りと斬着ん  
 と躍上りも兩個の弟子大地へ民助を引居  
 大箱髻を掴み率此上ハ汝が勝殺しと突立  
 ルバ民助ハ苦と叫びて苦惱を大箱ハ冷笑ひ



問ひく 照苦しうらん然ハ此世の暇把せん  
 と云宛民助が竹杖為持腕斬落せば七頭八倒  
 大箱苦む民助を丁と就返し心下ぐさと刺徹  
 せバ塵空を掴み哀れ哉杜の草葉の露と俱  
 無敢息絶ぬ時ハ民助廿二才ハ大箱師弟三個  
 ハ微笑乍ら跡暗まし行方不知成りけり  
 拾六回 小車忠僕の死を止むる話  
 却説小車夥計の非人門ハ文注所より被召と  
 聞一同ハ列立途を急ぎ行程ハ聞間ハ鳥飛廻  
 り頻ハ声を發し啼叫べバ非人門頭を振立夜  
 鳥の啼ハ不吉之思しや火災の前兆成り乍然  
 俺們ハ焼べき家庫不持バ鳥啼の占ども無益  
 へと云宛歩行ト鹿藏ハ尙主人の躬上ハ凶吏  
 や出来たる知せ有んろと噫氣持思さよと  
 思ひ下り無是非隨ひ行処ハ助向より以前  
 侍士出來リ亦高声ハ呼り見ハ夫へ進むハ天  
 王の杜の非人成や御金藏の偷賊ハ已ま手廻





たんば最早汝等文注所へ不泰とも宜早々  
 把やと言捨て去見小車大きき不審て諸々  
 忽成有司哉大金の紛失を食夥計の吟味より  
 して異儀こと思ひたるは從云疾知る物成バ呼  
 付程不速き空脚を為踏ハ胴窓へと云鹿藏  
 も打笑否早解更しき狼狽的哉と云小車示  
 云ハ下僕無那与胸噪さ仕リ民助の躬上被  
 扱侍ハ親方より前へ飯度侍ふ此段御免と憑  
 鹿ハ源治点頭許り鹿藏怡悦揮足出て飛  
 如ハ馳戻リ忙ハ敷祠に近寄兎肩バ扉の開き  
 鹿ハ鹿藏ハ不審民助様と呼立れ共應答なけ  
 れハ是ハ如何と狼狽搜索脚下何致許さ透  
 し視ハ噫無懣や民助ハ血汐塗ハ腕切落さ  
 仰反リ死分野鹿藏思ハ才後居伏是ハ  
 下麼奈何と猛可仰天起んと為共脚疼て声も  
 揚て哭泣叫ト薦舎ト臥鹿阿元若婆声を聞つ  
 け塞リ出鹿藏が傍に漸々倚鹿藏殿と云死



老女も供も哭悲し見鹿藏ハ泪を拂ひ阿元老  
 女此の残王へバ委細の訊知給ふらん先那的  
 か此如く主人を殺害致侍ふを聞め給へ疾々  
 と苛立鹿藏ハ老女ハ涙押拭ひ声震して前の始  
 終詳細諱しつバ鹿藏黙然怒も成己大館悍怯  
 の舉動俺を出抜病者の主を返り討とハ悪も  
 思し渠奴們那地も退き為や方角何と尋見ハ  
 老女答て然も侍る暗路黒白も分らぬ共脚音  
 を聞侍る笠松の方へ行ぬと覺と云半半聞  
 て鹿藏ハ主人の敵一討ふ為と蒐出さやれ侍  
 れよ鹿藏と声掛小車押止の從先刺一伍一什  
 ハ立窺成り民助の横死黙然入て詞も出た  
 餘の憤怨ハ理りみ而然社と顧へど今宵の計  
 較猶何様の奸策有んも計り難し今ハ餘も大  
 事ぞうし且ハ此死骸を棄置ても本意は有ま  
 じ地頭の檢便を受杯せバ拋ころなく素性も  
 明し云ぬバ不成是亦餘の迷惑と思へり小車





之を隠便は計ふ則ハ昔此終ハ早く藉リ跡を  
 隠も主人の為勤弁有鹿蔵と云々突もと思へ  
 ど口惜しき為齒嚙哭泣む分野ハ餘所の者  
 さへ哀まて非人門も哭立る鹿蔵愈々心も乱  
 れ腹撞切んと為是ハ小車周章確と押止ぬ是  
 不覺成鹿蔵殿俺言処を如何聴哉此約死ハ誰  
 か為ぞや逐腹新逆功とハ成まじ俺も素ハ侍  
 士聊示道ハ辨へり後の後大事と社謂へ  
 死而忠義を立と思を生て為竭所存ハ無みや  
 民助殿の末期の無念ハ你の外ハ為暗人なし  
 怒ハ乱而武士の極意を過失給べうらす且民  
 助の亡骸を你ら葬る更社忠義の追善此上ハ  
 しと被説論れて鹿蔵ハ感伏し泣々頓て亡骸  
 を埋葬して石を寄て證と成花を供へ水を手  
 向て終夜回向の声不絶非人門ハ打集て鹿蔵  
 が憂を慰め鬼時ハ小車復鹿蔵を諫る様俺薄  
 情ハ為似共你此地ハ永く居ハ非ナ大館奴徒



黨して未時ハ亦你ハ災害迫る解も有ん且此  
 を選て本望も達せらる可しと云ハ鹿蔵兼諾  
 而源治初め非人門ハ腹をけて主の組念の竹  
 杖の刀を腰ハ佩再會を期天王の社立去ハ  
 ○拾七回 小戸田非人鹿蔵を救ふ話  
 去程ハ忠僕鹿蔵ハ小車源治が諫ハ依て天王  
 の社を退き國中諸所を巡り鎌の巢穴を探し  
 うと其時末ど到ぬ故ハや終ハ搜的らナ無詮  
 方美濃を立去尾張國岩倉山の城市ハ到り町  
 家弟郎の無差別袖乞成て通り見ハ或藩邸中  
 ハ竹刀の音高く試合の掛声戸外ハ洩聞見ハ  
 鹿蔵耳を打頃け郎の分野を熟々視ハ外面十  
 間計リハ正中ハ冠木門を構へ門柱ハ表札を  
 帖朝山流剣術指南所小戸田於三兵工と大筆  
 記せり鹿蔵好ハ道成ハ娯際ハ立寄石ハ脚  
 拭延上リ窓の障子の破ハ中の容子を差覗け  
 ハ間廣警古場ハ五七名の壯士竹刀拿て勝負

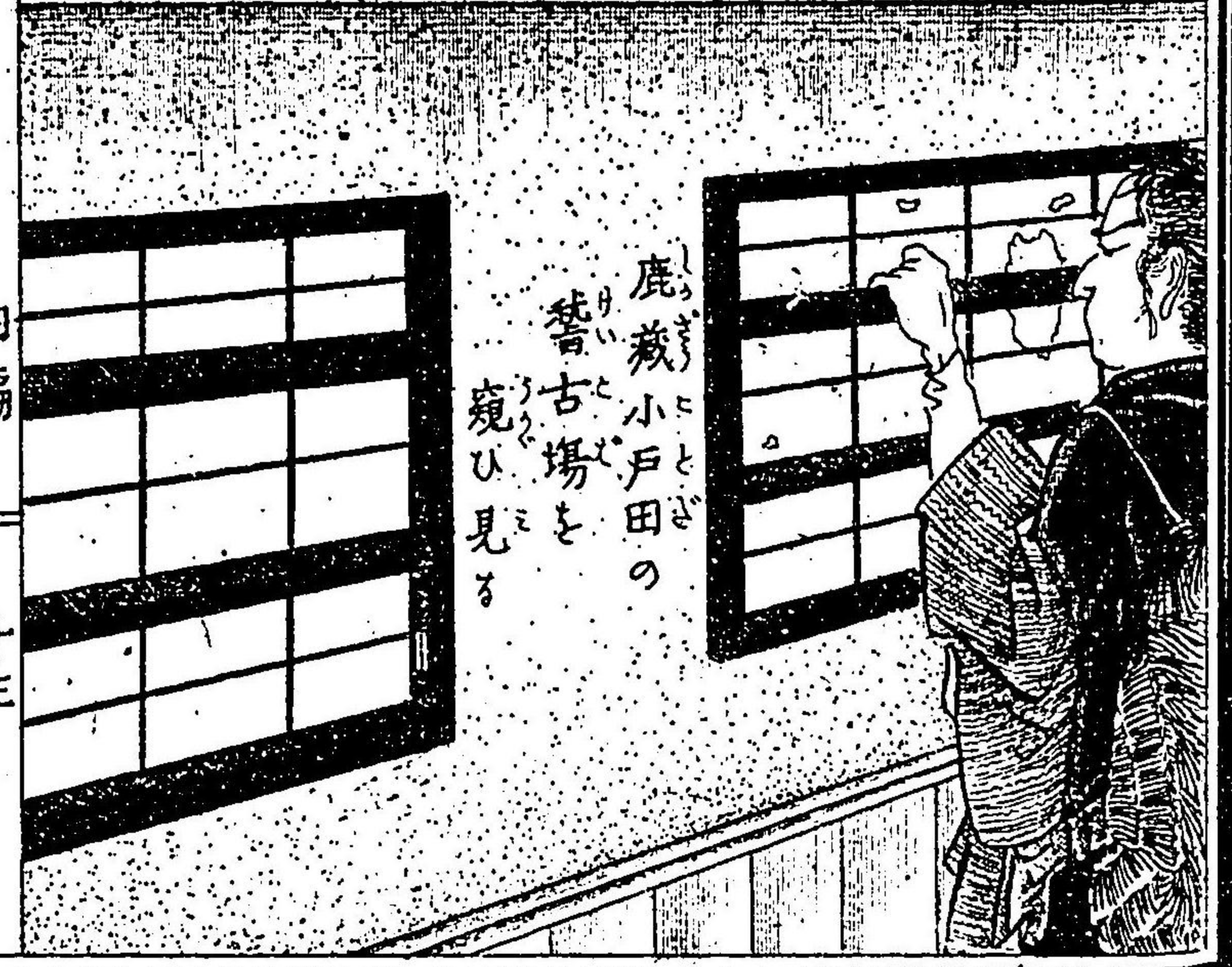




を諍ふ鹿藏無餘念打膽の居裡思ふ声を揚  
夫其処を衝入と臆手違此方ハ大刀外打轉  
さすやと云そ壯士們聽付て不審窓の障子  
を颯と開て鹿藏を視大に憤怒無禮慮外の  
乞食奴窓を覗さへ不埒成る俺們替古の是非  
を申悪奴ハ奴僕逐除ひ侍へと声高言渡バ  
奴僕兩個捧追拿門外ハ馳出非人奴起那を視  
哉昼奸盗の下繕ひまや已嗣性骨捧を受よ  
と計批ルハ鹿藏受留是ハ異成御咎侍ふ乞  
食ハ御餘受侍る窓ハ内外を覗開たり  
依て乞食も覗て乞里想給へと冷笑掴し棒を  
別轉せバ其勇威ハ二名奴僕後居ハ瞳と為倒  
鹿藏ハ看向も不遺竹杖突て歩去時節來掛る  
小戸田の弟子浅田五郎此体も看駭き急さ  
門内ハ馳入師匠と告る窓の裡ハ門人們  
奴僕の内容を瞻の居しが堪へ兼て竹刀提携門  
外ハ兎出非人奴侍と呼掛つ後を逐進哥ハ



鹿藏ハ不手後を振轉視殿輩如何被為哉乞食  
と棒打大人氣ましと云捨行と為所を瞻収め  
為過嘲哂哉目ハ物看んと從左右打て掛ハ鹿  
藏ハ得為と七個敵手ハ成竹杖を以受つ流つ  
防さ支る其利術七個の壯士ハ大刀餘乱て四  
途路ハ成良此時小戸田ハ浅田報知ハ非人の  
手更不審と窓の下來窺ひしか鹿藏の働さ尋  
常不成ハ大に感而門人衆被扣よと云て壯士  
大に愧入門内へぞ出入見鹿藏ハ冷笑ひ優々  
と而歩行も小戸田弥三兵衛奴僕ハ命して鹿  
藏を呼止させ手裏を取へし連玄關の前ハ伴  
侶入させ餘三兵衛工立出席も看鹿藏ハ尋ねて  
云様從先刺汝が舉動を看も勿々珍敷木更抑  
何成人の果成人生圍ハ何の的成そ具よ云ね  
縋ハ就てハ目を拭て召仕得さす可と云鳥ハ  
鹿藏有難と頭も下下僕恣淺儀さ射上成る産  
國を粟すも嗚呼ハ似と元來九州の産んよて



鹿藏小戸田の  
替古場を  
窺ひ見る

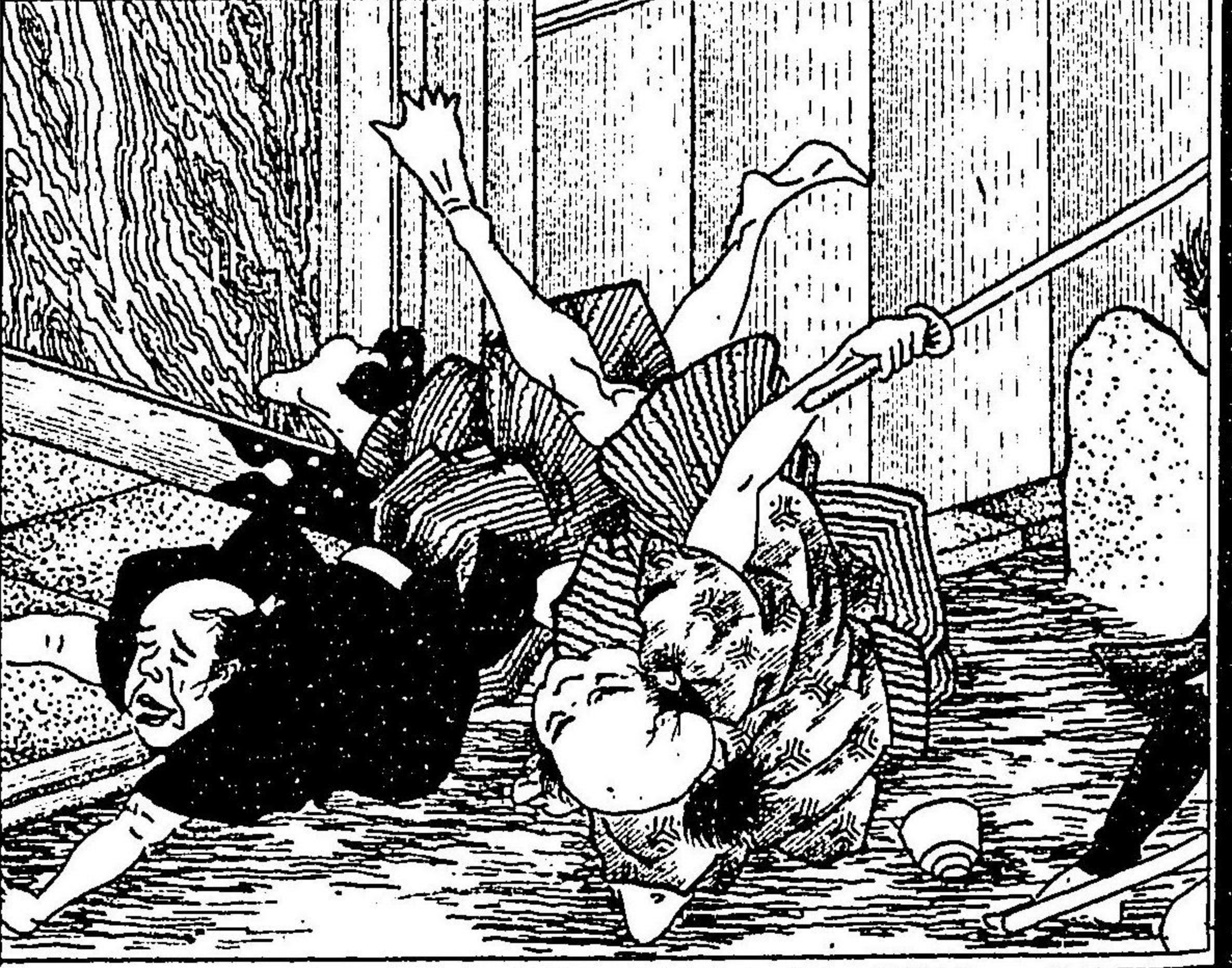


氏素性まき匹夫の悴れ些少剣道執心は就て  
 猿の人真似固より青雲の志操ハ無く名利よ  
 泥む慾も侍す深く盗跡の横悪を忌み人の余  
 飢渴を凌ぎ天命と觀而今日も過し主取奉  
 仕敢て不願と言無艶答免バ小戸田ハ聞て打  
 微笑汝が名ハ那と呼りや下僕ハ鹿藏と申侍  
 ど乞食夥計の的ハ鹿子と申侍りと迷ハ  
 弥三兵工深く心は感し此の匹夫悴れ非ず何  
 飲仔細の有的可成と疾も察し重て云ハ汝  
 可惜壯年の射を以非人の境界ハ陥ず共人並  
 の處作可為辭へ仕官道そ不意ハ亦其仕様百  
 束有べし俺弟宅ハ漸日止宿べし悪ハ計ハじ  
 と仁慈の詞ハ鹿藏も感拜而打歡悦て諾し是  
 小戸田鹿藏ハ浴させ衣服を興へ食を喰せ  
 奴僕の子舎止めける去程ハ光陰無閑守茲  
 早月の上流と成鬼一日小戸田玄關端へ一個  
 の武士入来て通史を請此時鹿藏應と答へて



小戸田の内弟子  
 非人と慢どり  
 挫しがる

從子舎出着バ武者修行と思しく身丈六尺ハ  
 餘れハ武士ハ鹿藏側ハ行て來意奈何と尋れ  
 彼武士腰を屈て申様ハ其ハ大友の藩士象  
 瀧身之助宗龍と申者去頃大友家暇を戴き諸  
 國武術修行ハ過歴成者ハ侍ハ御當家の番名  
 相慕ひ態と推參仕所ハ侍ハ一手御試合を  
 被計御指南ハ預り侍ハ於ハ満足仕ハ迎最  
 敬禮厚述り鹿藏答へて其旨申入ん少時夫  
 待せ給と修行者そ扣へさせ小戸田ハ恁と  
 通し鬼バ弥三兵工聞て大ハ駭然彼ハ萬夫不  
 當の剛勇の士ハ前年鎌倉ハ於て渠ハ勝負し  
 者若千と聽り此方試合倘不覺を把んも計り  
 難し俗ハ剛者ハ除て通せと云ハ汝能ハ断り  
 既す可と云鹿藏諫の申様是ハ如何思召哉象  
 瀧頂羽の勇有共勝負ハ時の放れ術ハ剛弱  
 の論ハ不寄今御對面ハ既し給り門人衆  
 の思惑も有先生の御名ハ抱り且ハ欺波家へ



十四



不忠は當り侍人と申息ハ跡三兵工大は感愧  
して俺聽て對面成へさぞ汝象瀧を能禦應侍  
へと言附て鹿藏を立せ遣兩手を拱ぬき勝負  
一條を心裡に屈託せり稍少時過て小戸田ハ  
象瀧を為對面互に禮儀を尽して應答成試台  
の東ハ明日仕らんと約して尚四面八方の談  
柄は速ひ時刻迂而其夜ハ象瀧を客室に臥せ  
小戸田終夜試台の工夫を微しける

○拾八回 鹿藏象瀧昇之助を伏す話  
斯て翌鳥時刻と成ハ主客試台一見せん速斯  
波家老臣朝倉兵庫之助を始め名士七個其他  
小戸田の門人一統は出席成替古場の四方に  
列坐末席ハ内弟子奴僕們も見物す此時象瀧  
昇之助鉢巻釋き成優然と坐る着ハ跡三兵工  
も衣服更さぬ入来て藩中一統象瀧も會釈  
して主坐は着見門人ハ木刀を正中に山形に  
直し已に其準備も仕果息ハ小戸田声高島

頼母を呼出し象瀧と木刀可合と命す頼母心  
得侍らふと躬準備成象瀧は目礼而木刀は手  
を拭ハ昇之助も起上木刀拿て躬を構双方  
つと声を拭木太刀を討込上段下段少時程互  
ひに打合象瀧太刀を下と着し頼母が腰を  
確と打ハ大島後居は墮と倒る象瀧傍に立倚  
て手苛當り不申しや真平御免と為會釋結て  
渡部九郎兵工森山圓平の兩人も師命を受けて  
象瀧と試合息ハ兩個共は秘術を尽すと象も  
昇之助の手練不適當打負て引退けバ今ハ小  
戸田も無詮方此上ハ某が試合可申と準備を  
成て立對ひ目礼して双方共木刀を握率と声を  
拭透を窺ふ龍虎の争ひ列座の象人息を詰瞬  
さも不為者処は遙う末座の方より兩大音突  
し喃先生那迎輕々教手を下給ふよ内弟子  
は列る下僕へも試合を許し不給よや願くハ  
其御木刀を申請ん服方も御免有と最中へ踊



小戸田跡三兵衛  
鹿藏を救ひ  
上る





出的あり是別人成す鹿蔵へ跡三兵衛ハ是を  
 見て鹿蔵俺が危急の場を助けん所存成可と  
 推量共故意と面も怒を見し汝下僕の躬を以  
 猥りに指出絆無礼へと叱咤ハ象淳微笑押着  
 め否先生懲五ふな健氣志操棄へうらす率々  
 被来々しと言見ハ小戸田ハ衆人の思惑を憚  
 リて兼諾の詞も無り兎を朝倉兵庫之助声ま  
 拭喃々先生苦うすまじ彼の一試合許されよ  
 望む所太殊勝は覺ゆへと勸よ小戸田心裡よ  
 欣悦鹿蔵は試合を許し木刀を過手象淳は對  
 て賓客無礼を想し給へ少時試合を渠も譲り  
 ぬ一手御指南憑み存すと會釈述て元の座ふ  
 着象淳ハ乍起礼を成兎諸鹿蔵ハ昇之助ハ為  
 目礼木刀取上真向ハ押し飛掛て打入ハ象淳  
 為得と請流て丁々もつしと為打合が不測成  
 哉鹿蔵ハ木刀陽炎電光の如く振込振拂ふ其  
 利術象淳心ハ為恐怖倍々精心勵しつて討合



兎が始終象淳受太刀と成て仕付絆も不得既  
 太刀合せ十合ハ到象淳木刀被刃落て背を健  
 ろよ一打被的眼曇て伏倒れり此時小戸田  
 声も掛勝負ハ為着象淳氏痛ハ処ハ有ざる哉  
 と問七名藩臣始め介座ハ列る衆人ハ鹿蔵為  
 仕と讚給兎鹿蔵ハ昇之助の傍ハ倚作法會  
 釈速兎ハ象淳躬を起而礼を返し天晴侍ハ足  
 下手練忍入而侍ふ迎頭を叩き為感拜るハ小  
 戸田ハ微笑下藩の術ハ怪我高名賓客の御丹  
 練ハ於ハ俊傑へと敬而賞ハ象淳も此詞ハ感  
 し屈伏の色を見し兎斯て小戸田ハ七個の藩  
 士を別席ハ請而響應鹿蔵ハ象淳を客室ハ倡  
 引て酒飯を進めり象淳鹿蔵ハ對て曰く其數  
 半諸國を經廻數多試合侍ひしが大体其ハ勝  
 的よし然ハ足下計り速め妙術感ハ為堪然社  
 富家の先生の御器量ハ復想像ハて恐れ入と  
 云ハ鹿蔵謙遜那條下僕如きハ物の不敷成當

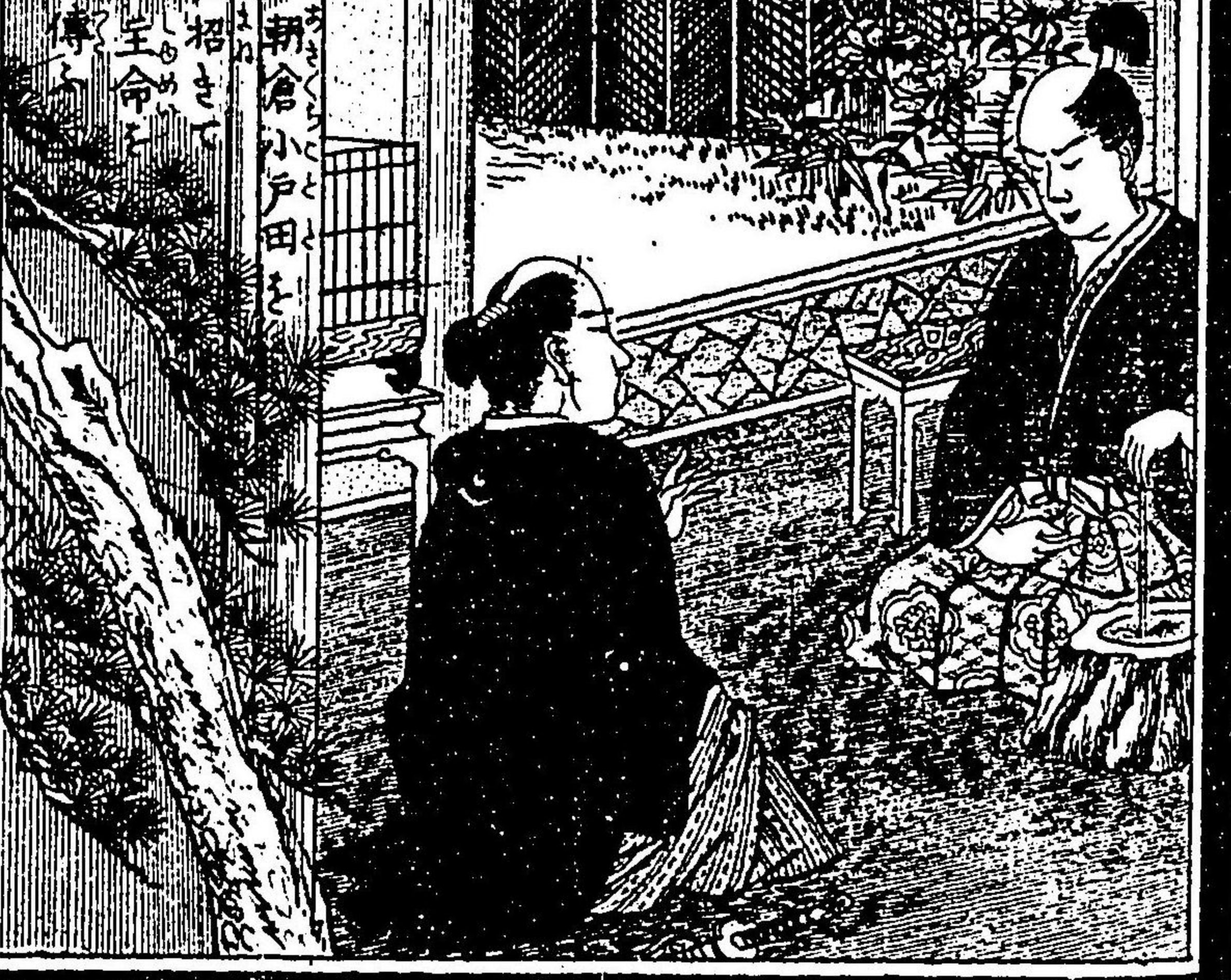




家門人衆は數多侍之失敬の申條成と貫邊當  
 家の主人と試台玉はんハ自今拾箇年分程  
 御修行を練玉へ夫迄ハ速難く社侍ふ言す御  
 心被障そと云象湧然も有可と心裡と  
 思ハ示諭如何心得侍ふ練摩の功積て亦々  
 推參仕る可連象湧小戸田も暇を乞朝準備を  
 為鹿蔵へも一礼を演再會を約して立去ける  
 ○拾九回 鹿蔵射術の譽れを頭ハす話  
 夫天ハ無屑人そ以て言しむ古人の金言宜哉  
 鹿蔵が手練の評判高く成て斯波家老臣登城  
 の刻大守ハ斯と為言上義重殿開召て萬卒ハ  
 得易一將ハ得難公的社見度思こと宣ふよそ  
 朝倉兵庫之助令兼して俺弟郎も飯り頓て小  
 戸田も招き書院も迎入て兵庫助被申見様今  
 日足下を招く緋ハ御邊の宅に罷在り彼鹿蔵  
 物件之先日為同道的の們より大守へ為言上物  
 もや今日某を召ん煩りも對面を為望給ふ最



も無仔細浪士成ハ家臣も召抱へん思召小戸  
 田へ内意を語と有就之きて彼鹿蔵が素姓未  
 歴委細足下も聞把度と被申しら小戸田答  
 る様是ハ不存寄君の尊命彼壯士の素姓未歴  
 拙者渠より聞侍ふ処ハ日向佐土原出生て  
 親ハ炭焼渡世的とそ非人と成鳥轉末の所ハ  
 未と詳細聽侍ね共生得寡愁愚直も而奸曲の  
 者も侍ハす當春拙宅門前も来り門人們の警  
 古も視き彼是批判申應を門人們憤怒りて挑  
 し擧動看請し梓故拙者扶助而弟郎も止置  
 侍ふ然と渠奉仕志願非と申せば貧容と而滯  
 留させ侍ふ大守の御聞も為達條且御目見の  
 御説等渠も為聞ハ満足侍ふべし乍然右申上  
 る條寡愁愚直の的侍へハ御前もて稟告  
 言も倘憚りも無過言申出さんも計り難く存  
 む人物も於ハ跡三兵工受合奉るべしと云  
 ぞ朝倉大掟して某明鳥為登城て御前宜く執





成べりし明後日早朝足下鹿藏同道まで被末  
 べし俱に登城致べしと云ふ小戸田ハ今兼し  
 朝倉を辞而飯見小戸田飯宅而鹿藏を一室よ  
 招き朝倉より被申し始終を語り明後日早朝  
 登城の旨告見ハ鹿藏黙然類リ謙遜て辞  
 退成を跡三兵工種々論し勸め見ハ鹿藏  
 今ハ辞退も成す此上ハ命に従ひ奉る宜く御  
 執計ひ玉可と辨引成見借其鳥に到見ハ小  
 戸田ハ鹿藏を倡引朝倉の弟郎に至ぬハ早  
 從大守御召は依て登城の赴き申見ハ三  
 兵工遅刻と心ハ駭然急ぎ登城而大玄關を過  
 廣間の椽側に出て拜伏す列坐の一藩中衆人  
 ハ織田信政浅井長之同く子息之轉朝倉教  
 景同教正由利朋秀浅井房吉大郷玄達同國定  
 深木昭久佐々木成朝谷中輝種小堀氏清茨木  
 元包吉崎元之松田雪鉄齊同安綱鈴木長持前  
 川道政を始め其外扈從近士の面々左右に列



リ上段ハ大守斯波義重殿出座在す此時近  
 士三谷才之進を以命を傳て申様ハ戸田食者  
 鹿藏とやらん其方武藝ハ上達の赴き御前聞  
 召御懇望し思召且得所那を以て奥儀と成  
 との説意と問ハ鹿藏平伏し恐れ下ら申上  
 侍ふ其貴人の御目留り侍程の藝術進ハ  
 侍ハねど馬鎗刀の儀ハ聊示心得もこれ有  
 万乞此儀何れも命じ玉ハ上見ハ供へ  
 奉るハ速見大守近士ハ射場馬の準備命玉ハ  
 ハ頭て廣庭ハ幕を張射場ハ度一寸の金的を  
 十二掛並べ此処より三段計隔て射手座を設  
 け村重藤三人張の弓ハ闊野の弦を張十三束  
 三伏嵩の元朔の矢を把揃へて件の座上置  
 る君臣一統座を椽側進て居列ける爰ハ  
 吉崎茨木の兩人ハ當家の弓馬の達人と尊バ  
 る者成ハ鹿藏ハ一言心ハ懸浮浪士の為  
 七術赤耻素のぞと嘲り下ら見物成ぬ此時大

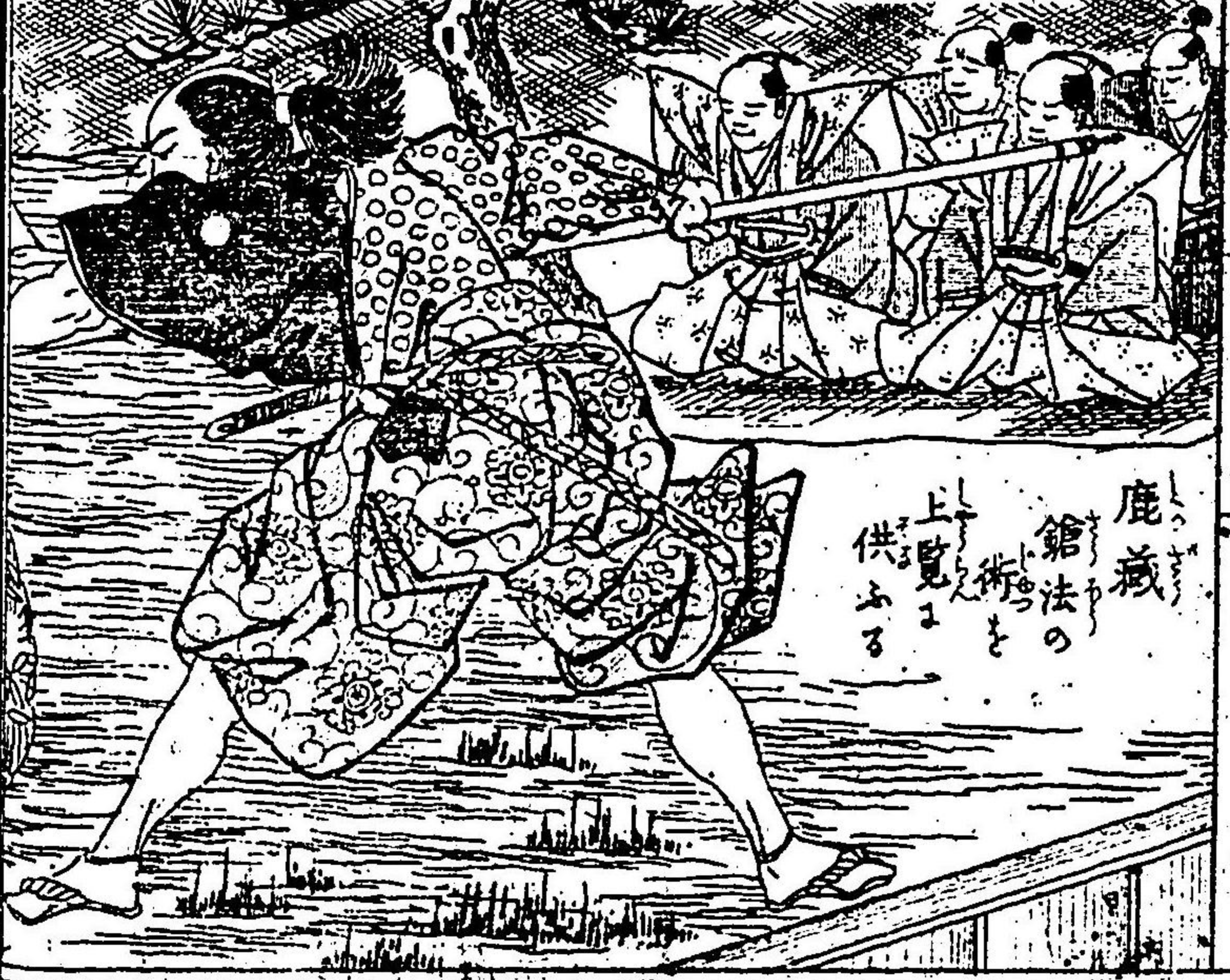




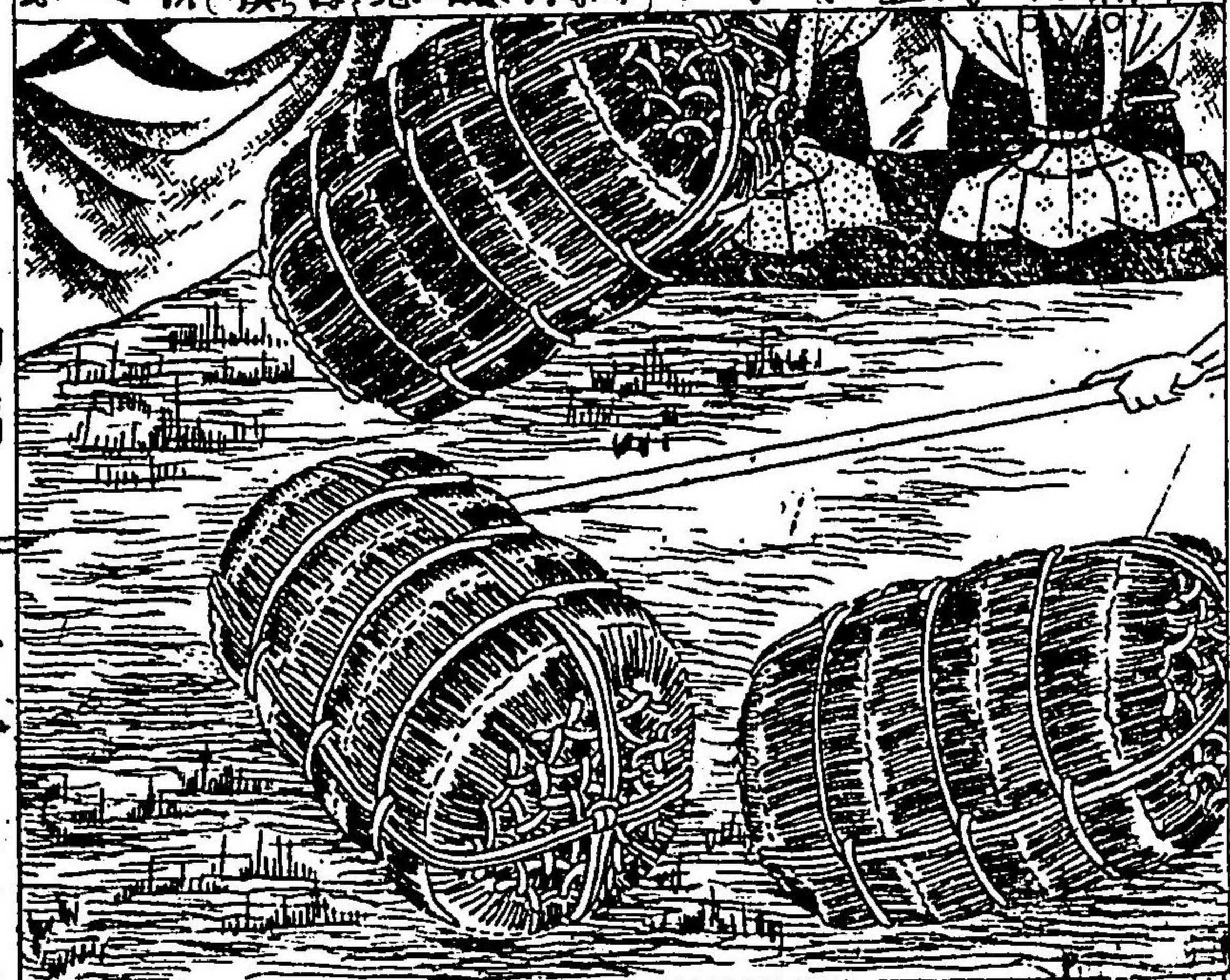
守促し給へハ鹿蔵畏まりて起立り衆人ハ會  
釈而射場は到りて弦を引き矢を射る能  
試み矢をつかひ満月を引絞ひ固て矢利  
は射出て十二の金的を悉皆正中を為射貫朝  
倉突然起夫々疾と指揮は喚と答死度り五分  
の銀的を其員十二持出掛ルハ鹿蔵心得り矢  
追拿當殿ハ星の頂さ左右矢坪を透て射中鹿  
ハ君臣一賞の声充滿て為射哉と感じ鹿  
殊は吉崎茂木の兩個愕然て心地酔か如く茫  
然と仰天す大守甚と御感育有て次ハ馬術  
を覽と宣ひ紅葉馬場と為入給へり

○二拾回 忠僕志操を明し退去する條  
斯て鹿蔵ハ為準備て紅葉馬場より到り而て荒  
馬ハ打跨り輪乘鹿子乗等術を賜駈立り更ハ  
度ハ速ぶ大守大ハ喜悅在し續て鎗術上覽を  
供へしうハ君を始の列座衆火海内一個の勇  
士と称て感賞の声少時ハ不止鹿蔵此時鹿蔵

休暇被仰渡大守書院に御坐を遷されて小戸  
田召され重而鹿蔵を被召出御酒を下し給  
ひ斯波殿自身鹿蔵が武藝を賞し給ひ祿五百  
貫を以て永々主従の因と結んと宣ふと虽も  
鹿蔵固く辞退成て諾せず大守氣色を變じ宣  
ふ様ハ余餘禮を厚成て召抱んと申し偏屈  
不兼引ハ余を為主が不足成哉又祿が不足  
思哉介透答聞と怒り給ふ諸老臣始め列坐の  
面々駭然て手ハ汗を握り小戸田ハ殊ハ為周  
章數回鹿蔵を顧回死御前の御意を損る更抑  
何成所存や疾御請を致被可と小声を以て諫  
め危ハ鹿蔵恐懼て迷惑し熱々思ふ今ハ宿意  
を打明すハ所詮御會得有まじと決心而為言  
上様是ハ無勿体尊命侍ふ某如きま主を撰  
む祿を貧る儀争ふ心は慾し侍ハざらん哉併  
尊意を恐れ惶侍へハ躬上宿意を申仕べ  
し翼がハハ御披露なく思免は預り度侍ふ



鹿蔵の鎗法の  
上覽を  
供ふる

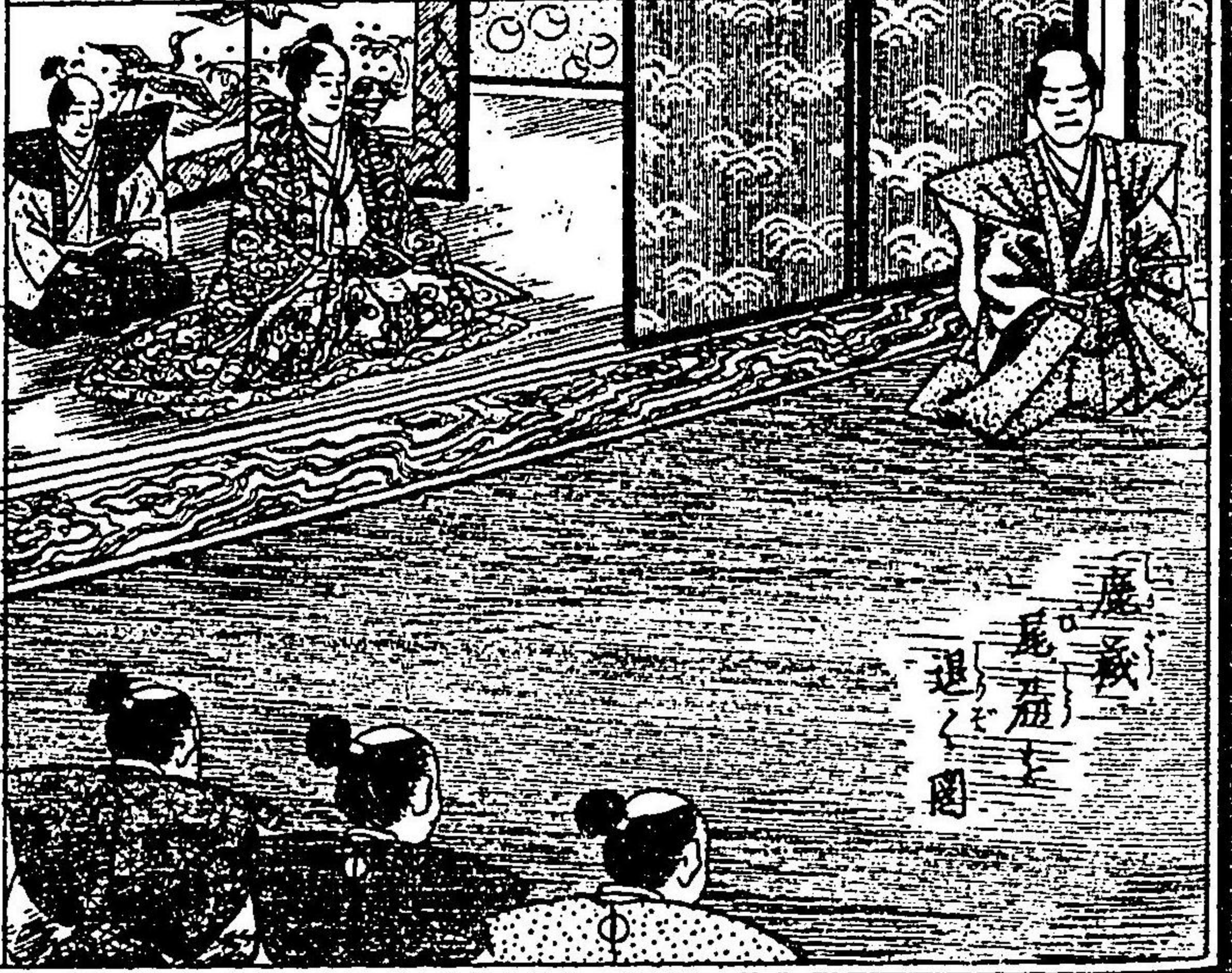




と述べて小戸田も明し言上給ハ可と云小戸田も始て是を聞駭然更大方成す深く忠節義操を感じ御前進小音言上見様ハ鹿蔵事元亡主の的有て斯様始末の侍ふと委細言上成を義重聞召て感じ玉ひ隠余疎忽を申より怨る忠義の士をして咎し詞耻敷見誠其浮田傳五右工門とやら鹿蔵の如き家係所持しハ主人手柄成見鹿蔵よ汝宿意を遂し上ハ當國よ来て余は奉仕よ必ず相待可居命鹿蔵九拜而無冥加御証りま不肖の朝把大慶至極と謝奉りける頃て斯波殿近士よ命じ餞別と而黄金卅枚を鹿蔵に賜りしれバ鹿蔵大守の御仁情を感じ數多御禮を述べ御前を退き下城よ速ひけり侍て鹿蔵ハ後可辞所存有ハ賜金の内よ以て衣服双刀を調へ小戸田朝倉へ服せして尚再會の馬を約し



應永十稔の五月十二日尾州岩藏山の城府を發し東海道よ出駅路よ蹊リ鳳來寺よ詣て門谷駅よ宿んと為し此地ハ一個旅客ハ止宿す事法度と述ハ無是非此を打越す宇連村まゝ上田茂左工門と云ハ大度よ倚り一宿を乞是主人笑止思て拙入て一泊を為致とリ鹿蔵深怡悅と演終日の勞を憩て臥す入て為熟睡よ深更ハ聞家噪き立賊入とリと驚警声よ鹿蔵ハ眼覺し刎起て帯引結び兩刀踏さし厨の方を窺ひ寄ハ盜賊們覆面頭巾を冠り抜刀引提傍徨とリ鹿蔵勃然と躍り頭れ從片端引捕へ力よ乘て投着とリ賊ハ大に駭き下ら余抜列て斬て掛き鹿蔵同く刀を援受流し拂ひ除斬込刀を擲き落し忽々拾三個を悉皆く的殺し是ハ主人大に歡悅す只管鹿蔵を伏拝めり鹿蔵微笑刀を収め何も過失ハ無りしやと問ふ主人ハ頭を下家族皆々怪我も





侍ハナシ此賊ハ隠便ト助け放ち給ハル可是  
 此上の御仁情ヲ侍ト云バ鹿藏ハ眉ヲ鬚メ夫  
 ハ那故の更ぞうしと云バ主人ハ頭首て此賊  
 徒の出所日ヲ相分侍レバ頭巾ハ面ハ隠セ  
 共疾其人ト音声マて知侍リぬ是余郡代三浦  
 殿の家臣ト云バ鹿藏心ハ感じ主人の仁恕  
 有難危共然聞てハ尚怒し難一々且賊の面  
 者給ト云バ主人ハ燈火以て伺テ購ル思  
 透テ郡代の家臣成バ小首ハ鹿藏へ申様ハ  
 的ハ主の威光ヲ發着押借無心ヲ為平生酒  
 色ハ耽リ喧嘩口論ヲ村々苦メオト雖も郡  
 代の威ハ恐れ那粹も訴訟テ置ぬ天の冥罰此  
 為体ト云バ鹿藏借々可思白痴ト云バ此奴們  
 社獄卒ニ且某ト打任王へと拾三個の賊ヲ悉  
 皆く活を加へ繩以撃テ柱ニ結着汝等恩誅ヲ  
 食ひ兩刀ヲ帶し四民の司トテ射ヲ持テ領分  
 の農夫ト成し苦の尚怒メ不飽足賊行ヲ勤ク



夜盗を懲し  
 鹿藏上田の  
 大難を救ふ

獄卒奴俺則チ天ノ代テ多年積悪ヲ可懲トて  
 鹿藏衆賊ヲ引立道ヲ急テ郡代弟郎へ天明迄  
 歩行着有司ト就テ轉末ヲ語リ上田方の止  
 宿の旅客名ハ鹿藏ト稟的ニ渠門示後御扶持  
 して置テ時ハ國民の煩ヒ些クナリまじ當家ハ  
 今川候御郡代ト而斯様の的們不詮整ハ聊示  
 御由断の儀ト存侍ニ是等者ハ不忍バ賊ヲ幸  
 テ訴訟ヲ急度罪ヲ懲シ給へ今川家の御制  
 度の儀等拜見仕度侍リ上田ハ滞留仕  
 中御仕置願しく侍ト漢ヲ聞テ有司們大  
 驚怖早速三浦右工介ハ告レバ三浦仰天し  
 痛ハ鹿藏ガ容ヲ視テ天晴の壯士成バ心ハ感  
 激不淺此武士容易不成英雄へ斯様ハ宥り侍  
 へと家臣ハ言合ハ有司鹿藏ト向ハ賊臣  
 所業申様多し急度仕置可致侍ニ貴客在宿中  
 沙汰仕テべし賊ハ恥手請取侍ニ糾明申中  
 ハ御飯宿成下さるべしと申テ鹿藏微笑直





様上田方へ立候なり  
 ○廿一回 郡代三浦鹿藏へ進物を贈話  
 諸も鹿藏ハ宇連村上田茂左工門を許し在宿  
 而郡代が返答を待所ハ四五日経て三浦が家  
 臣素井健助上田が宅へ来て鹿藏は對面を講  
 鹿藏立出て双方初對面の禮儀終て借健助申  
 様先日ハ貴方の御計ひ不測の兇賊們を搦め  
 給リ早速手通被下條御働さハ申迫り申  
 穩便は御意合れて郡代の名を世は不爲立賊  
 行頭は為懲給ハ勇と智と云その御奉勤謝し  
 奉は詞も無く尤とも言語同断の悪徒故後未  
 職分の的們へ能看せしめの罪人成ハ則ち拾  
 三個の賊斬罪ハ處し扶持方を又収し國言を  
 根を断し侍ふに依て是等貴方へ申演其恩沢  
 を親ん為ハ主人某も命じ下遅日來訪仕る所  
 侍ふ貴方御勇武の程右工門感伏し忍ず近  
 曾薄志の儀侍へ共御示御族中の御慰しの



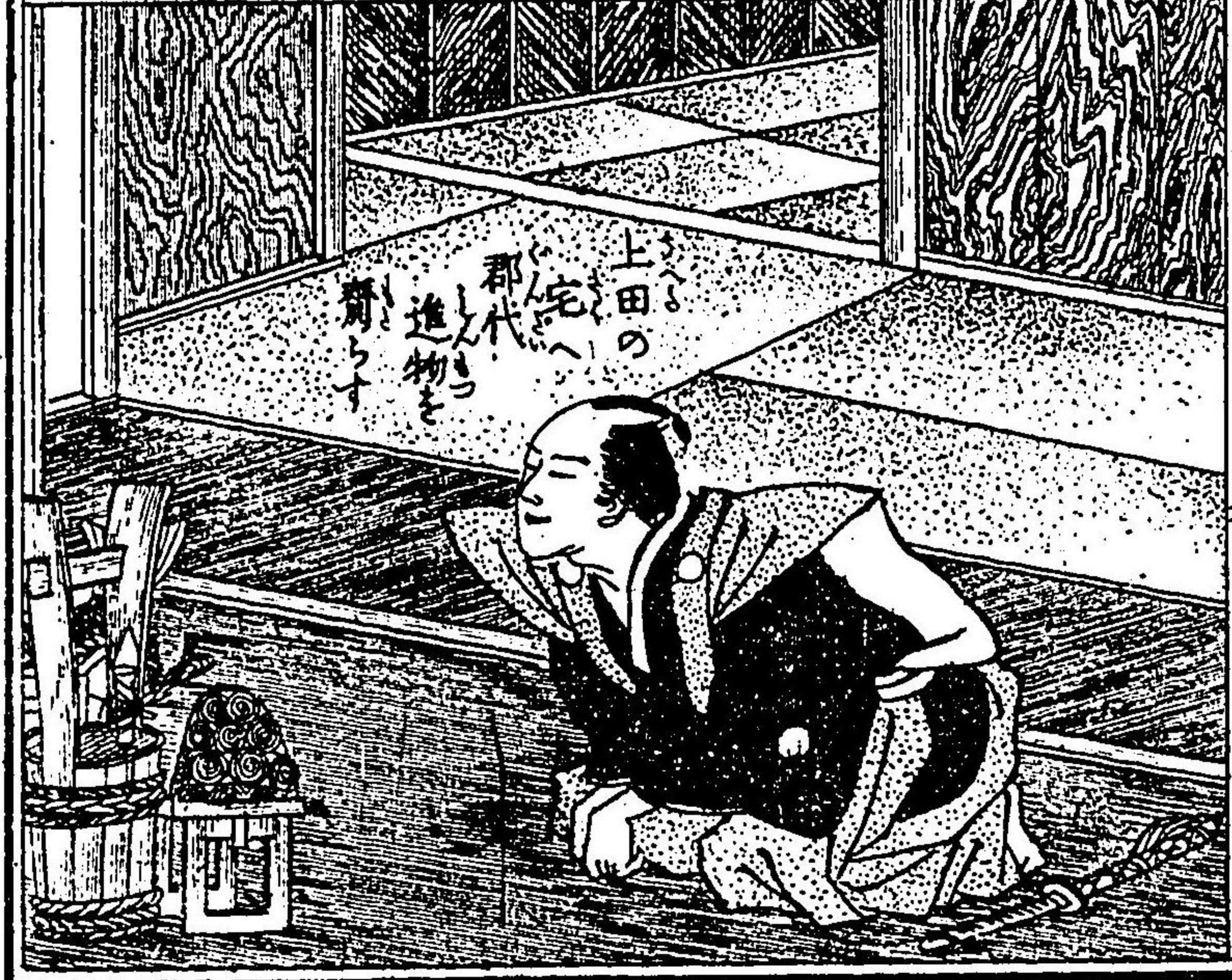
十三人の夜盗を  
 捕へ鹿藏郡代邸  
 宅に到る

為粗品と呈進仕り度侍ふ御咲收給ハ  
 於ハ某追歡喜不抄すと進物拿出鹿藏が前  
 並べ宛諾禮厚く述べ鹿藏ハ怒慰禮を報  
 而其進物を贈ハ黄金廿枚巻絹袴者と被贈  
 リ鹿藏申様ハ是御念入たか種々の贈り物將  
 御口演の程痛入侍ふ者却而愧入處ハ某其  
 御夙説を相待と申ハ右賊徒の御仕置を耳  
 們懸罪ませしめ給上ハ向後御支配下安穩而  
 御仁計潤ふべし其一宿の懸と送禮の為御示  
 主人を助くる腕立那ぞ御郡代の謝禮を等ん  
 や拝納仕りたる同前へ何誌御使節の計ひを  
 以て御主人へ送納給ハハ様偏り翼がひ入  
 と速見共健助強て進りし因鹿藏終て為辞  
 無術然ハ命は願ひ奉ると再三頂戴さ收め鹿  
 素井ハ大説而少時四面八方談柄を連べハ主  
 人ハ酒者を整へて兩士饗應見健助鹿藏は問  
 て云様貴方ハ徳御軍身の旅行仕給ハハ御仕





官の御望まても、裁備ハ武術の御修行成乎と云ハ鹿蔵打笑者、從幼羊武藝ハ心を權き諸流ハ渡而習吉仕れ共、未心ハ協流儀ヲ不得夫ハ彼木傳流マて待ふハ貴殿御知己ハ木傳流の達人方ハ定而數多御在へららん御名を聞せ給成ハ何方マても推參仕リて一術御指南ハ預リ度侍ふト申セバ健助頭も頷け何様木傳流儀ハ侍れ共、達人ト申す人ハ其駭多心的リも無之併當時鎌倉佐々目谷ハ駿多門丞ト申て古今未嘗有ハ武藝の人あり貴方且此人ハ一面有て試ミ給へト云ハ鹿蔵深ク謝而姑ク酒嚙ハ時迂しぬ鹿蔵此ハ木傳流の吏を問ハ仇大館の手蔓を得意を以て二恣て酒嚙ハ關ハ速ハ健助席を閑キ鹿蔵へ限モ告茂左工門へ厚礼を速從者引連成りける種ハ上田ハ贈リ黄金ハ旅の費ハ懐中ハし翌



日朝ハ上田ハ家も立出て東海道へと心さす上田の家族等父ハ別ル思ひ為て餘波も惜更限リまし鹿蔵ハ東海道を越き歩ハ鳥程ハ金谷駅の此方成島村ト云ハ所ハ到リ昼飯を為食迎澤屋ト云ハ進ハ床ハ腰打掛て憩ひ酒飯を末て喫食セリ當家の亭主ハ金右工門トて天稟ハ快氣成的マて且孝心深く母ハ克仕へ莉妻ハ良人ハ列て孝貞節義有的一全右工門熟々ト鹿蔵の風体を看ハ有由武士ト思ひ為會釈而四方八面話成見所ハ外面ハ男女の頃禮垢深ハ衣服の上ハ裨衣着し脊ハ古き行李も負て傍邊笠を脱て沢屋ガ家ハ入て飯も素ハ鹿蔵無何心談話を止て此頃禮を視ハ豈測ん哉一周止宿河筋牧方の淡路屋佐兵衛の夫婦成ハ鹿蔵酒盞を置て是ハと駭然見ハ頃禮夫婦ハ鹿蔵を看等ハ駭ハ佐兵衛容を改ハ鹿蔵ハ前ハ進ハ借ハ珍ハ鹿蔵ハし



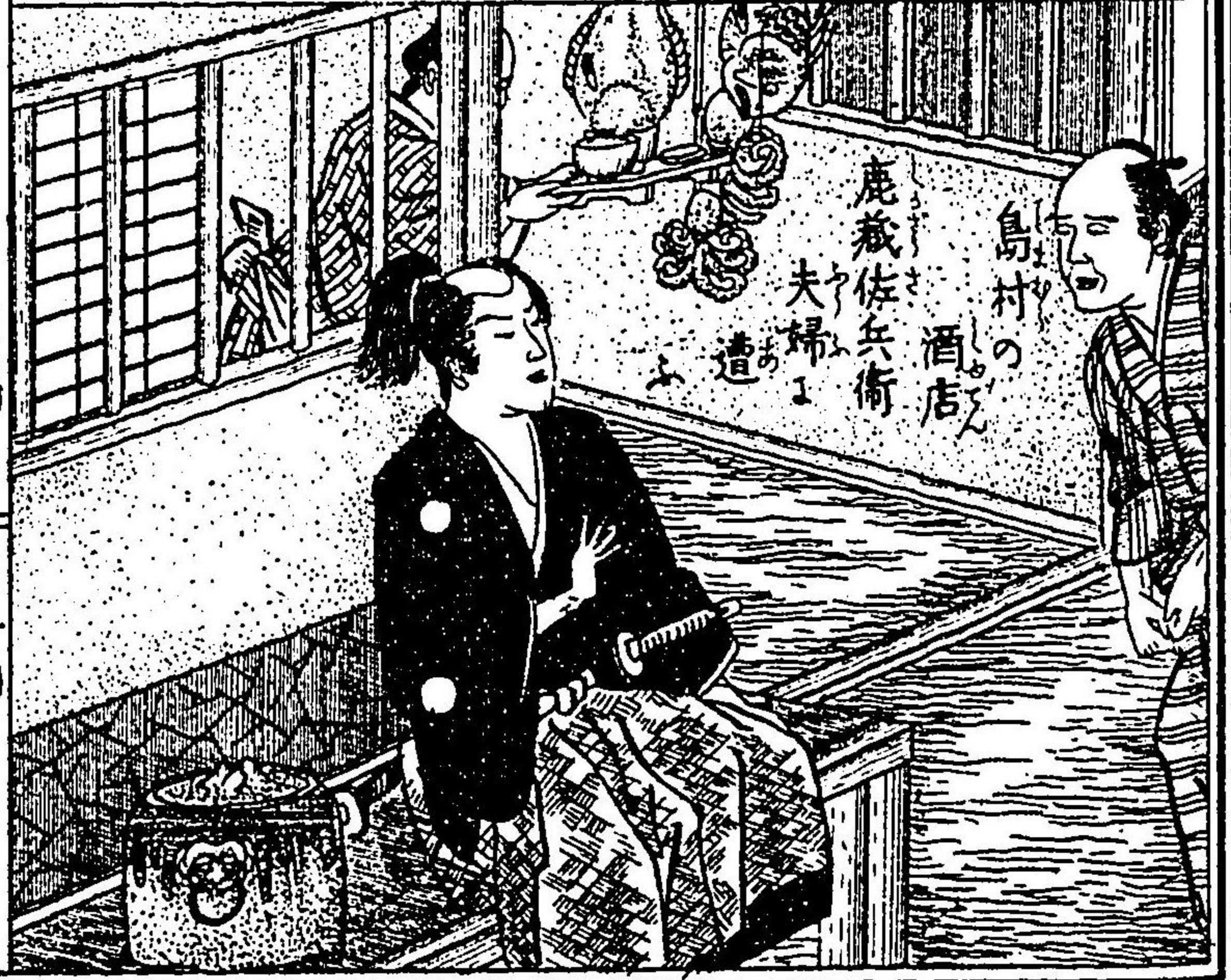


早一周も御目も不拭唯今ハ那方御在すぞ  
 民助様も御無更成よや思ひ奇の對顔  
 先為變なく御井出度日外御啓行の前日ハ楠  
 葉へ御出依候り不給如何成れし哉と存侍ふ  
 民助様と此ハ御同道よきハ御宿元ハ居給乎  
 と尋らるるハ鹿藏ハ主人の落命を胸ハ浮め  
 ハ泪突掛横死を茲ハ告る由も無故意一條の  
 應答へも成一別以來の情を迷民助美濃國天  
 王の杜りて病死せし由を語り拙者ハ去人の  
 世話を受けて當時食客よて暮し侍ふと冥言  
 を混迷鬼ハ夫婦の的之を聞て俱ハ歎き俺等  
 恁頃禮致も佗様別染の處女阿鴨客年兩個立  
 出給ふ後十日と鳥も過ぬ頃那思ひしハ黄金  
 廿枚も持出夜ハ紛れて家出成侍る後の歎き  
 ハ詞ハ不竭人を分て諸方を探せど生死知  
 ねハ夫婦の哭泣一個處女ハ振残され那業  
 世を送ん哉俺子の菩提万ハ一ハ存命成ハ



巡り國よて遭ハ為飲と今茲從正月西國秩父  
 坂東の鹽場を順拜し出侍ハと哭入ける鹿藏  
 夫婦ハ話を聞長嘆而有鬼ハ佐兵衛漸々泪を  
 拭ひ俺們從是鎌倉ハ札所を廻らんと存ぬ御  
 縁も不竭ハ尚御目拭ん民助様の御法名を聞  
 ハ鹽場ハ日向仕らんと問ハ鹿藏其志操を大  
 さき感じ夫ハ忝まく存侍ハ御回向呼出し給  
 ハ俗稱民助よて吊給る可と憑ハ佐兵衛打  
 點頭準備を成て袂を分出んと為ハ鹿藏ハ砂  
 金を紙ハ包て指出是ハ薄志ハ侍ハ共回向を  
 憑ハ隨縁佛果菩提喜捨を表す僕ハ志操實錢  
 と成て給らハ平等利益ハ預りも為と云ハ夫  
 婦も受取つ了笠打披きて鹿藏ハ別れ金谷の  
 方へ過去ける

○廿二回 鹿藏大井川よて危難の話  
 斯て鹿藏ハ淡路屋佐兵衛夫婦ハ後も着送り  
 下ら元の牀床ハ腰打拭て残酒を喫飲て在鬼





処へ亭主從與出來て御知己の御出會と存て  
 少時失敬仕り侍ふこと亦も談柄は速ぶ外へ  
 外面へ四五個の侍士來りつ各位置を打冠れ  
 リ此的澤屋が内に入ると而那哉咲きて金谷の  
 方へ越さざり鹿藏金右衛門是を曉らす談柄  
 相口興入無餘念打語ひしが金谷の方より  
 一個の川越漢男走來り澤屋の内へ進入鹿藏  
 對云鬼様御武家様ハ川を越給ふまや倘  
 御下は侍ふ成ハ早々御越被成て可然時移り  
 去御大名の御通行よて川塞明日成てハ  
 通行も出來まじく奈仕給ふと問鬼ハ鹿藏問  
 て大ハ周章為心得直様行ん能社為知吳とリ  
 夫へ參と答けれハ川越漢子ハ尚忙し立元來  
 方へ馳去鹿藏酒者の價を亭主ハ渡し股を  
 一つ澤屋も立出彼川越の後を逐つ大井川  
 の涉り場へ到りて賃錢を究め負渡し乗已  
 川中半町程出掛ける時鹿藏那心まく後



着バ浪士体的四五個金尻うらげ為陸の  
 方ハ傍徨り夫が中ハ仇大館加り在て鹿  
 藏を暗め居鹿藏ハ斯と視より心苛ち渠奴那  
 首ハ在吏知バ此川踰まじ物そ是ハ滑り為と  
 川越トヤヤ等壯的憑じ絆有俺們島村の居酒  
 把忘所持品有大儀まがら後へ戻せよ賃  
 錢ハ可増と憑じけれハ川越ハ濼て計較更有  
 心を得侍ると云宛ハ川の深水へ故意行伴一  
 聲發て鹿藏も真逆様ハ打込哉否哉已ハ陸  
 兎上り合圖を為ハ數多の川越此処後処より  
 頭ハ出川端ハ集ふ的廿餘入手ハ掌ハ薪を引  
 提て泳き上らバ計倒さんと川中ハ眼配り待  
 拭此方ハ大館們鯉口窪げ川越の加勢を憑  
 じハ躬構而扣へより然程ハ鹿藏ハ水底探り  
 て浮き出陸の方ハ佐野と視バ豫て計較し更と  
 着て數多の川越乘ひ水面ハ踏石を投付  
 薪も握つて打殺さん勢ひ成ハ大館ハ衆人ハ





指揮ます為体成バ鹿藏原來仇の奸計は陥し  
 う悪き舉動へと怒て水も蹴立撥分此方の岸  
 は泳ぎ寄バ大館川越へ向ひ夫と云より川越  
 門ハ河原の礫を掴で手掌に投付る之をさし  
 むの鹿藏も些し疼し泳が上り木礫も避んと  
 水中に沈み入し石を投る更敷の如く鹿藏  
 身体被打破此時忽地勇氣を勵し真裡程と成  
 彼志津三郎の刀を禰帯て水も潜つて川下  
 へ行辛じて岸に上る末武運の不尽けん  
 陸に那の準備も無んバ天の助けと大きき怡  
 祝刀推乱離と引抜て川中耳眼止む川越門の  
 横合より由断見すまし斬立れバ川越門ハ大  
 駭然薪打振て八方從把困む鹿藏ハ死勇  
 茲に極めて怒れ乗す手練の利術躍り掛て兩  
 段に斬倒し左右に進ハ大袈裟利子割向ふ的  
 ハ棒打或ハ竹割車切千變万化の秘術を顯ハ  
 し破乱維々々々斬倒せバ暫時ハ川越十四



五個美武を如く被斬殺残の者も重病薄傷  
 は河原に一條の血泉も成勇士の烈戦ハ川越  
 門ハ惑乱す大館門ハ鹿藏が勇猛よ恐れ散乱  
 す川越は紛れ逃去竟然共多勢の川越門礫を  
 頻りに投打物うら流石の鹿藏も鐵石よ非ざ  
 れバ全身は瘡受血も染り精神衰へ危ふく者  
 ける浩る所へ金谷の方より真鷲も兎來る的  
 有て大勢の川越門を突除削飛而進ハ大音  
 上て呼ハリ鳥様川越衆少時待此闘争休ハ碩  
 け侍へ双方等ヤと言掛り鹿藏此場の仲裁  
 人ハ那的成哉と面も看ハ是島村居酒屋の澤  
 屋が亭主金右衛門にてそ有兎不測の加勢ハ  
 鹿藏ハ万死の中も些少間を得腕を懸め一息  
 継金右衛門ハ云鳥様拙者今心苛きの更侍へ  
 バ真平御用捨被下べしと云捨大館が後を逐  
 留と兎出ま金右工門急ハ禁めくやそれ賓客  
 先待れよ此大難の争闘半バ尚其急ふきを素



大館川越門 鹿藏 苦む



め給ふハ愈々必死を望む所其負傷躬を以て深入為給ハ危しク々と云ふ鹿裁も打傷痛み  
躬に徹へ苦きハ忽地眼量一聲叫而悶絶せり金右衛門ハ大に驚ろき抱き起して百般  
抱き加ふるハ漸々呼吸も吹轉せり然れども數刻の戦ひハ躬を苦めし故今ハ一言吐緯も不能  
齒も切齒リ泪も流し怒氣胸も溢れて唯叫く耳まり此時馬借問丸の的們漸々ハ竟來リ此休  
き者より川越們を殺しく呵責つけ金右衛門ハ為會釈此人ハ奈何計らハんと云ふ金右衛  
門衆人ハ云ける様喧嘩の轉末ハ追刺聞ん此侍士ハ俺們的の宅へ疾竹橋まで送給へと早々  
一挺の竹橋ハ鹿裁も乗島村の澤屋へ送らせ是ハ問屋の小的を附添外科の療治を言つけ  
ける借金右衛門ハ跡ハ残リ川越們を呼て喧嘩の始末を問極むるよ了得ハ一味せしハ只  
管口替りて即答も為す不為與川越們最初よりの轉末を述べれば金右衛門大に怒つて夫ハ  
以ての外ハ無法あり他は語らざれ通行の的も川中へ打込とハ言語同断なり急ぎ彼侍士の  
衣服行囊を把上通与べしと問九諸共下令ければ川越們恐入て手配り成ける斯て金右衛  
門ハ尚争闘の突否を糾して云ふハ出所知ざる洋浪士ハ悪叟と知つて為荷橋徒黨の罪ハ遁  
るべからず且國主は訴へ出急度御裁許預るべければ汝等一個も越えこと罷り成す  
逃駭れせバ尚罪深しと殺しく申懲し且此旨を訴へんと金右衛門ハ馬借問丸の的們と川  
端も立去り

繪本佐野報義録第四編終

明治十八年三月七日 翻刺御届  
同 十九年三月廿七日 刺 成

定價金十八錢

編輯人

故人 知足館 松旭

原版人

大阪府平民 北村 宋助

翻刺人

大阪府平民 鹿田 源藏

賣捌人

東區安土町三丁目廿番地内壹番戸 星野 熊吉

賣捌人

水村 二玉堂







特 60

243